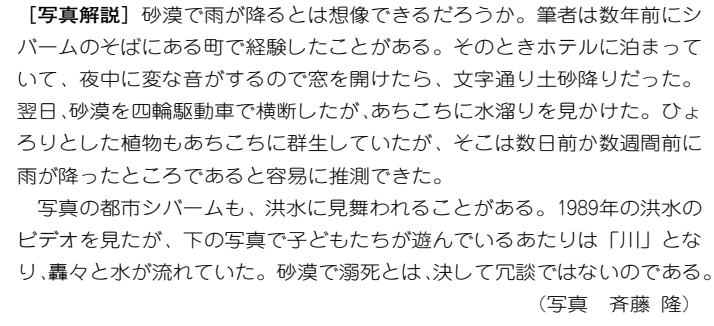
地理資料シリーズ

シバームとワジ



［写真解説］砂漠で雨が降るとは想像できるだろうか。筆者は数年前にシバームのそばにある町で経験したことがある。そのときホテルに泊まっていて、夜中に変な音がするので窓を開けたら、文字通り土砂降りだった。翌日、砂漠を四輪駆動車で横断したが、あちこちに水溜りを見かけた。ひょろりとした植物もあちこちに群生していたが、そこは数日前か数週間前に雨が降ったところであると容易に推測できた。

写真の都市シバームも、洪水に見舞われることがある。1989年の洪水のビデオを見たが、下の写真で子どもたちが遊んでいるあたりは「川」となり、轟々と水が流れていた。砂漠で溺死とは、決して冗談ではないのである。

（写真　斉藤 隆）

ワジ、またはワーディーは涸れ谷、涸れ河と訳されることが多い。「涸れ」るといっても、雨が降れば雨水が集まり、場所によっては農業が可能となるため、中東では非常に意味のある言葉であり、地域である。

ワジ・ハドラマウトはイエメン共和国の東部に広がる、アラビア半島で最大のワジである。全長はおよそ160kmで、支流となるワジがさらに枝分かれしている。飛行機から見下ろすと、茶色い台地が一面に広がり、緑色のラインが、時には太く、時には細く、幾筋も走っている。あまり高低差のないワジの「底」（海抜650m前後）を車で行くと、車窓には、畑や集落が近くなったり遠くなったりしながら、背景に山々がいつまでも続く。

この地方の雨季は春と夏であるが、雨は局地的にしか降らず、また降水量は年によって変動する。たとえば、シバームから20kmほど東に位置する都市セイウーンでは、2001年の降水量は17.1mmだった。そのほとんどが10月に降ったもので、その他、８、９月にわずかに雨が降っただけである。しかしワジには、雨季に蓄えた水が豊富に備わっている。およそ20万人の人々が、ワジによりそうように生活を営んでいる。

ワジ・ハドラマウトでは農業が盛んである。とくに有名な農作物はナツメヤシの実で、この地方では、普段の生活でもよく食される。それ以外に小麦、ゴマ、トマト、ジャガイモ、タマネギ、キャベツなどが栽培されている。ヤギ、ヒツジ、ラクダ、ウシなども飼育されているが、それらは乳、肉、毛皮を得るほか、農作業や運搬に使用されている。

しかし歴史的に見ると、ハドラマウトは過剰な人口を外へ放出してきた。東南アジアや東アフリカにイスラームを広めたのは、ハドラマウト商人であるといわれる。彼らは移住した後でも故郷とのつながりを保つことが多い。東南アジアや東アフリカでハドラマウト出身者の住む町や通りを見つけることはたやすく、反対にハドラマウトでアジア系やアフリカ系の顔立ちの人に出会うこともまれではない。また産油国への移民も多い。

ワジに点在する都市はいくつもあるが、シバームはその美しい景観で有名である。シバームの市壁には門が１つしかないが、その中におよそ7000人が住んでいる。およそ500戸の住宅の多くは４～７階建てである。シバームでは夏には日中40℃を越えることもあるが、家の中は意外に涼しい。それは壁が厚く（階によっては60cm以上）、日干し煉瓦でできているからである。煉瓦は泥と麦藁を混ぜ、木枠で型を取り、数日間天日にさらしたものである。建物の一部は白く塗られているが、これはヌーラと呼ばれる石灰石を焼いた後、棒で叩いたもので、壁に塗るときにはさらに水、砂、最近ではセメントも混ぜる。ヌーラは、建物の補強および装飾の役目を果たしている。煉瓦もヌーラもその工程はほとんど手作業であり、その作業場はワジのあちこちで見られる。こうして作られた住宅は涼しく、また丈夫であるといわれる。茶色一色になりがちな風景に、ヌーラの白色と農作物の緑色はアクセントをつけている。

シバームは内陸にあるが、人々はアラビア海にあるムカッラーなどの港で獲れたサケ、マグロ、サメなどの魚と、パンよりも炊き込み風のご飯をよく食べる。

「砂漠の摩天楼」と称されるシバームは、1982年にユネスコの世界遺産に登録されたが、伝統的な住宅の維持は難しく、写真からもわかるように倒壊寸前のものや、空き家も少なくない。都市を保存することは、建物を保存することではなく、人々が実際にそこで生活をすることなのである。

（日本学術振興会特別研究員　大坪玲子）